

子どもの命を救いたい。

JIM-NET代表：鎌田 實

今年もチョコレート募金の季節がやってきた。バレンタインデーに向けて、12月1日から受付を開始する。集まった資金は、イラクの白血病やがんの子どもたちの医療費に充てる。ぼくたちJIM-NETの大きなプロジェクトの一つだ。

イラクでは、劣化ウラン弾が落とされた地域に小児がんや小児白血病が増えている。劣化ウラン弾と病気との因果関係をつかむために遺伝子の研究をするイラク人医師の支援もしているが、まだはっきりしていない。

このプロジェクトは、多くの人の協力によって成り立っている。チョコレートは、北海道を拠点に展開する六花亭に、利益なしで作って頂いている。チョコレートが入る小さな缶には、イラクの病気の子どもたち自身がイラストを描いた。自分も病気でありながら、ほかの病気の子どもを救う活動に参加できることを誇りに思っている。

今年15歳のハウラは、小児白血病を克服した。自衛隊が派遣されたサマワに住んでいる。

ハウラは、東日本大震災が起きたときにはこんなメッセージをくれた。「イラクから皆さんへ 私は地震の話聞いて日本の皆さんのことがとても心配になりました。早くよくなるように祈っています。皆さんのことを思って、たくさんの赤い花の絵を描きました。皆さんに赤い花を届けたいのです。」



私の心はいつも日本の友人の皆さんとともにあります。ハウラ・ジャマル」

今年のチョコレートの缶は、彼女の書いた花のイラストをプリントすることにした。



昨年は12万個のチョコレートを用意し、すべてなくなった。今年は14万個、7000万円の募金を目指している。福島の子どもたちの支援にも充てるため、数はかなり多めとなった。

缶の製作は、草加市の中小企業にお願いした。不景気の中でありがたいと喜んで受けてくれた。発送は障害者の就労継続支援施設が請け負ってくれている。大変な作業になるが、仕事ができるのがうれしいと言ってもらえた。

みんながあなたをかさでつながっている。あなたもこのつながりに加わっていただけると本当にうれしい。

チョコ募金が始まります！

JIM-NET事務局長 佐藤真紀

いよいよ、チョコ募金が始まる。今年、3・11の震災が起こった。石巻や福島での支援活動も加わり、JIM-NETも大きく変化した。

しかし、僕たちのイラク支援は、変わらない。イラク戦争から8年経った。アメリカは間もなくイラクから軍を撤退させると言う。

思えば、10年前の9・11のテロ。3000人近くの人びとがなくなった。怒りの矛先は、イラクへ向けられた。しかし、イラクは、この事件にはなんら関係なかったし、大量破壊兵器を使って世界を席捲しようという意図もなかった。

日本は、6割以上が、そんなことがある程度判っていて、戦争には反対した。しかし、政府は違った。小泉首相は、「世論に従えば間違うこともある」とデモに集まる群衆をいなした。アメリカが戦争するなら、支持をしないと、とんでもない経済的な損失を生む。「国益」のためには、戦争を支持するのは当然だという。

しかし、殺されていった人びとには、なんていうのだろうか？日本は、この戦争を一切検証しようもしない。未だに、劣化ウランの放射能の被害で殺されていく子どもたちがいる。そして、原発事故がおきた福島をみても同じような構造を感じる。

原発には、6-7割の人びとが反対している。それでも政府は、再稼働しようと躍起になっているし、世界に向けて、ポンコツの技術売りつけようとしている。事故の検証も終わらず、安全性も保障されていないのに。

「国益」のためなら、福島は犠牲になってもらおうと言うわけだろうか？

今年のチョコレートは、そんな思いを込めて、イラクの少女、ハウラと一緒に作ったものだ。今年、僕たちの思いを形に出来るのは、ハウラしかいなかった。僕たちのチョコは、おいしくて、かわいいだけでなく、実はもっと苦い現実がある。それをどう変えていくのか、みんなで考えていきたい。

イラクの子どもたちを応援しているチョコレート、日本の元気にも一役買っています！

「世界を元気にした人は、日本も元気に出来る」

これは、青年海外協力隊のキャッチフレーズだ。僕は、「日本も元気にするチョコレート」ということを言ってきた。イラク支援は、日本からお金が出て行くわけだから、日本社会にとっては、マイナスだ。それを支えてきたのは、日本が戦争に加担した「償い」だった。しかし、チョコ募金を続けていくうちに、僕たちの活動が、日本を元気にする力があることに気がついた。チョコは六花亭だが、チョコを入れる缶は埼玉の草加市にある下請けの製缶工場で作っている。たったの3人で作業している町工場には、ブリキ板を打ち抜くガチャン、ガチャンという音が絶え間なく響く。

缶工場での作業の様子



機械を使っているけど手作業に近い。40代の社長と、70歳を超えたお父さんと、おじさんは休むこともなく作業を続けている。一日4000個程度しか作れない。2ヶ月はJIM-NETのために働いてくれる。実は、お父さんとおじさんは、福島出身だ。「会津は、幸い放射能の被害はないのですが、先日は同窓会があって、会津に行くと、農家が多いので風評被害を心配していました」というお父さん。社長には、3歳の娘がいる。去年は、「イラクの子どもたちががんになっているなんて、大変ですね。子を持つ親としては、他人事とは思えません」と言っていたが、東京にいても放射能のことを気にしなくなりました。「父も、叔父も高齢なんで、いつまでやってくれるかわかりませんが、何とか子どもが成人するまでは、がんばらないと」福島の人にメッセージを聞くと、「頑張っている皆様には、頑張れとはいえません。何とか、一日も早く復興して、皆様が安心して生活が出来ますように」と語ってくれた。

ブリキの印刷を手配してくれている久野さんも福島に縁がある。バーの店長をやっていた事があり、お店で働いていた女の子が、相馬市の出身だった。福島を出たかったらしい。やがて二人は結婚した。今回の津波で、家族は無事だったが、実家が流されてしまった。義母たちは、久野さんの家に避難してきたこともあったが、現在は仮設住宅で暮らしているという。そんな久野さんが、6月に倒れた。クモ膜下出血だった。運が良かったのか手術は成功して、後遺症も残っていない。今回も、元気にチョコ製作を手伝ってくれている。

チョコ作りに携わる人は、「今年は、どんな絵なのか、毎年楽しみにしています」とみんな言ってくれる。

今年のチョコ募金の一部は、福島支援にも使われる。福島を元気にしたい。

JIM-NET事務局長 佐藤真紀

～ 梱包・発送作業の現場から ～

チョコの梱包と発送は、今年も川崎市の指定障害福祉サービス就労継続支援B型事業所KFJ多摩はなみずきに委託しました。今年は、チョコ募金14万個分のうち、12万個分の対応をお願いしています。この大変な仕事を統括して下さる主任の米田さまから、温かいメッセージをいただきました。



JIM-NET様のお仕事を手伝わさせていただくようになり、3年目を迎えることになりました。障がいのある利用者の方々の方が仕事を通じて社会参加する上でJIM-NET様のお仕事に携われることを、職員・利用者一同誇りを持って臨んでおります。本年は東日本大震災や大型の台風によって、被災地では甚大な被害があり、被災地以外でも人心に大きな爪あとが残った年であったと思います。であればこそ、チョコレートに皆様の善意を乗せてお届けできるこの仕事を精一杯がんばって、日本を元気にしていきたいと思っております。

KFJ多摩はなみずき 主任
米田 博之



梱包作業にいそむはなみずきの仲間たち



新作チョコ、梱包の出来上がりです！



カードに書かれた鳥は、福島県の鳥、キビタキのイメージです。

2012チョコ募金 1口500円の内訳と使途

